

## 韓国瓦生産遺跡の調査見聞録

奈良文化財研究所では、2000年度から、大韓民国国立文化財研究所と姉妹友好共同研究協約書をかわし、「日韓初期都城及び生産遺跡に関する研究」をすすめている。2002年度は、その一環として瓦生産遺跡をとりあげた。韓半島は日本古代瓦生産の原点、なかでも百済は飛鳥寺造営にあたって「瓦博士」を派遣した国だ。今回は、その百済の瓦を見に行つた。調査には研究所から毛利光と花谷が参加し、旧所員の佐川正敏氏（東北学院大学教授）と田福涼氏（韓国・檀国大学大学院生）に同行してもらつた。調査期間は2002年11月10日から16日までの1週間。

調査は、ソウル、公州、扶余、益山を訪ね、ソウルでは風納土城（国立文化財研究所）、公州では大田月坪洞遺跡（国立公州博物館）、扶余では陵寺と亭岩里窯跡（国立扶余博物館）、益山では弥勒寺（弥勒寺遺物展示館）などから出土した瓦を調査した。

**風納土城** ソウル特別市松波区、漢江沿いに位置する周囲3.5kmの長楕円形の土城。475年陥落した「漢城」の遺跡と推定されている。1997年に国立文化財研究所が調査した、竪穴住居跡出土瓦などを見学した。

軒丸瓦は、箔による施紋をおこなう。瓦当裏面の周囲に粘土紐を巻き上げて丸瓦部を筒状に作る「泥条盤築」技法で、半分を切り取って完成させる。住居跡では、丸い釘穴をもつ丸瓦片がともなう。丸瓦部なのだろう。

丸瓦は、模骨を使用しない粘土紐巻き上げの「泥条盤築」技法と、模骨に粘土紐を巻く技法の二者があり、凹面に布圧痕のある後者が多い。両者とも、狭端部を強くヨコナデして玉縁風に仕上げるものが多く、模骨にも段差を設けてははじめから玉縁丸瓦とする資料は少ない。

平瓦は、ほとんどすべてが粘土紐桶巻作り。わずかだが粘土板桶巻作り平瓦もある。桶の側板は幅が5cm前後あり、一部には縦紐の痕跡がみえる。叩きは、格子叩きと平行叩きがある。分割線は凹面から入れるものが大半だが、凸面側から入れたものもあった。

これらの瓦は、六角形住居の屋根の一部に使用されたと考えられている。丸瓦にみる2種類の技法の時期的な関係や、軒丸瓦、平瓦との組合せなど検討課題は多いが、百済初期の瓦が意外に瓦らしかったのが印象的だった。

**月坪洞遺跡** 大田市街の西方、月坪洞山城の南東に位置する遺跡（大田広域市西区月坪洞・山25-1）。1994・95年に、国立公州博物館と忠南大学校博物館が調査した。

出土した瓦は丸瓦と平瓦のみ。報告書では、丸瓦を3種類、平瓦を6種類に分類して報告した。普通の粘土板模骨（桶）巻技法の瓦は各々のI類だけ。丸瓦II類と平瓦IV類は凹面に「葦の簾の痕跡」をもち、平瓦III類はそれに布圧痕が加わる。丸瓦III類と平瓦V類は凹面に「縄蓆紋」がある瓦、平瓦VI類は粘土紐作りの瓦という。これら特殊な瓦の出土量はごく微量にとどまる。

「葦の簾の痕跡」は、確かに葦のようなごく細い棒を簾のように何段にも（多いもので10段）編んだものだった。日本で、竹状模骨丸瓦・平瓦とよんでいるものと似てはいるが、平瓦III類以外は布圧痕がないので、模骨（桶）に簾のようなものを巻き付けたのだろうか。「縄蓆紋」は、細い縄を1cm間隔で簾状に編んだ編布（あんぎん）だった（佐川氏の教示による）。模骨に布をかぶせる普通の方法とは違ったやり方を知ることができた。韓国では近年、古代山城でこの種の瓦がみつかるようだ。また、粘土紐を使った瓦は、報告書でI類とした平瓦にも紛れていることがわかり、全体の1%との報告の量よりは増えそうだ。日本の粘土紐作りの瓦は須恵器工人との関係で理解されがちだが、韓国でも土器工人の製作とみるのか、日本へは瓦技法の一つとして伝来したのか興味深い。陵寺と亭岩里瓦窯 泗泚時代を代表する丸瓦と平瓦をみせてもらった。陵寺（陵山里廃寺）の玉縁丸瓦には、玉縁凹面に布圧痕のない瓦と筒部から玉縁まで一連の布圧痕がある瓦の2種がある。前者は、飛鳥寺や斑鳩寺の「星組」と見紛う。後者と同技法の丸瓦は、日本では吉備池廃寺や山田寺を嚆矢とする。また、後者には玉縁段部に太めの糸でヨコに刺し子風の縫い取りをしたものがあった。川原寺、法隆寺西院伽藍、藤原宮に類例がある。陵寺は、660年の百済滅亡時に廃滅しているから、この種の技法の年代を考えるうえで重要な資料となろう。

亭岩里瓦窯を含め、玉縁丸瓦は凹面側から分割の切り込みを入れており、飛鳥寺の「星組」と同じだ。崇峻元年に来た「瓦博士」の兄弟弟子に会ったような気もした。なお、亭岩里瓦窯には行基丸瓦で片ほぞ接合をおこなう例があった。同じ技法をもつ斑鳩寺創建瓦の一部や新堂廃寺（大阪府）創建瓦との関係はどうなのだろう。

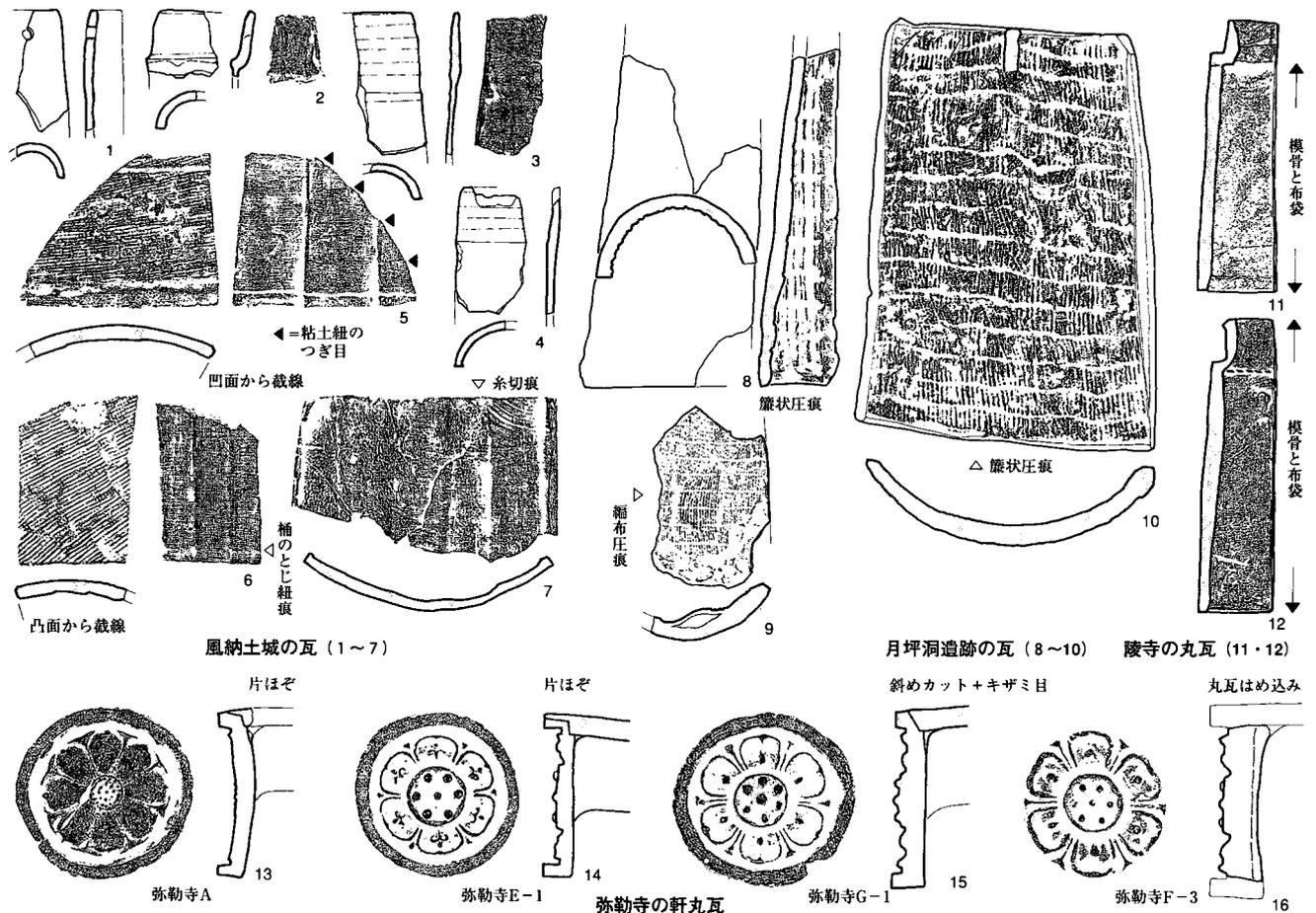


図52 韓国諸遺跡の瓦 1~12=1:8, 13~16=1:6 (各報告書より、一部改変)

弥勒寺 扶余から南に約50km離れた弥勒山の麓(全北益山市金馬面)にあり、百濟・武王代(600~641)に創建されたと考えられている。軒丸瓦を中心に調査した。

創建の百濟様式軒丸瓦には、素弁軒丸瓦(報告「単弁A~D」)、忍冬弁軒丸瓦(「単弁E」)、単弁軒丸瓦(「単弁F・G・I」)、複弁軒丸瓦(「複弁B」)がある。このうち、素弁4種、忍冬弁2種(E-1・2)、単弁3種(F-1・2、I)と複弁1種は、すべて片ほぞ接合をおこなっている。丸瓦部が残るものは玉縁丸瓦だったが、行基丸瓦も出ているのですべてそうかはわからない。素弁の瓦には、瓦当裏面を回転ナデ調整する例もある。

単弁でも弁の照りむくりが弱くなった2種(G-1・2)は、瓦当がやや分厚く、片ほぞ接合をしない。単弁G-1は、丸瓦先端の凹面側を深く削って先を楔形に加工し、タテキザミを入れて接合する。もう一つの単弁G-2は、逆に凸面側を深く削って楔形にし、やはりタテキザミを入れて接合する。この2種は、側面に調整の痕跡がなく、木製枷型の圧痕と合わせ目が明瞭に残っている。枷型は上下分割型だった。

報告書で、周縁の脱落した瓦当側面部分に布の痕跡がある、とされている単弁の1種(F-3)は、「嵌め込み式」の軒丸瓦だった。瓦範の内区部分にだけ粘土を詰め込み、分割前の円筒状の丸瓦をその周囲に嵌め込むよう

にして接合する。そののち、丸瓦の半分を切り去って、瓦当裏面に薄い粘土板を貼り足す。丸瓦の切り取りとその後の調整が丁寧なため、瓦当裏面の下半分には土手状の突帯も残らないようだ。報告書に外縁の残る資料がない、と書かれていたのがようやくうなずけた。

このように、弥勒寺創建軒丸瓦は接合技法が大きくは3種類に分かれる。時間差を反映するのだろうか。また、嵌め込み式軒丸瓦の存在は、これまであまり注目されていなかった。陳内廃寺(熊本県城南町)など九州にあるこの種の技法は、畿内との関係よりは韓半島との関係を考えての方がよいのか、などと思った。

初めて手にする瓦ばかりで、一同、やや興奮気味の1週間だったが、大きな収穫があった。同時に、今後検討したい、しなければならぬ宿題もまたたくさんできてしまった。最後になったが、訪韓と調査に援助を惜しまれなかった関係各機関と皆様方に深く感謝したい。

(毛利光俊彦・花谷 浩)

参考文献

『風納土城Ⅰ』国立文化財研究所 2001  
『大田月坪洞遺跡』国立公州博物館学術調査叢書第8冊 1999  
『陵寺』国立扶餘博物館遺蹟調査報告書第8冊 2000  
『弥勒寺遺蹟発掘調査報告書Ⅰ』文化財管理局文化財研究所 1989  
『弥勒寺遺蹟発掘調査報告書Ⅱ』国立扶餘文化財研究所学術研究叢書第13輯 1996